

文藝春秋

大正十二年一月三十日第三種郵便物認可
平成三十年九月一日発行(毎月一回)日発行
第九十六巻第九号八月十日発売

芥川賞発表受賞作全文掲載95th
高橋弘希「送り火」
文藝春秋
清原和博独占手記/両陛下最後の8月15日 九月特別号



將軍の世紀

やまうち まさゆき
山内昌之

武蔵野大学特任教授・
東京大学名誉教授

【第九回】父と子

徳川家康と秀忠、後陽成院と後水尾帝、細川藤孝と忠興と忠利。親子から見える「権力と統治」とは。



(上) 父の意向を尊重した徳川秀忠
(下) 父から忌避された後水尾天皇

(宮内庁書庫蔵)

一、「父と子」の統治論

「世代の交代によって或るものが他のものに取って代わることとは神の統治が指し示すところであるが、それと同様に王の治下にある民衆の善を、不在となつて後継者を巧みに供給することによって守護するのも王の課題に属する」。スコラ哲学者トマス・アクィナスの統治論はヨーロッパの王だけでなく、日本の為政者にも当てはまるのではないか（『君主の統治について』一〇五）。

十三世紀のトマス・アクィナスの言はきながら徳川家康が成功し、豊臣秀吉が失敗した点を巧みに衝いていく。戦の修羅場をくぐらず統治の試練も受けなかった秀頼と、江戸で天下人となるべく地味な努力を重ね挫折も味わった秀忠を比較すれば、平和を永続化させた点で秀忠に軍配が上がるのは公平な裁きであろう。また家康と秀忠は、統治論だけでなく、「父と子」という永遠のテーマにも答えを与えている。二人は、十六世紀のモンテニユの箴言を知れば莞爾として共感したはずだ。

「年老いた父親にとっては、自分の手で、子供に仕事の采配を取らせるようにして、生きていくうちは、自分の経験を生かして、教訓や経験を与えつつ、彼らのふるま

いを監督し、一家の格式ある名譽や秩序を、後継者の手に引き渡すべく、自分でことを運び、こうすることによつて、彼らの将来のふるまいに関して、これならば期待が抱けるぞと、自分で請け合えるようになれば、これは大いに満足すべきことにちがいない」（『エッセー』3）

統治の成功と教訓の継承、父と子の愛憎と信頼など、後世の人間が歴史から学ぶことは多い。その成功と失敗の例こそ徳川家康と後陽成天皇なのである。天皇が讓位できない障害は後陽成帝その人が作った面も否定できない。帝は父の誠仁親王が早世したために、帝王学を授けられなかった。その反面、秀吉の引きで即位しただけに、強運に恵まれていた。しかし、次期天皇への一宮・良仁（後の仁和寺覚深入道親王）の選任や関白秀次の追放など、朝廷人事を握つたのは秀吉である。

帝の特異性は、実子の一宮を嫌い弟の八条宮智仁親王を即位させようとしたことだ。これに失敗すると家康が推した三宮（後水尾天皇）と疎遠になり、讓位後に命旦夕に迫るも口を一言も利かなかった。後陽成院は、モンテニユが紹介するモンリユック元帥のように、子どもと一度たりとも腹を割って話をしたことがなく、父親の威厳を保とうとして、いかめしい表情を崩さなかったようだ。院には、三宮に愛情を抱き、子の高い徳をそれな

りに評価する父親の喜びを永遠に失った所がある。まだしも十六世紀のモンリユックなら後から自分の威圧的態度を断腸の思いで後悔したのに、後陽成院は後水尾天皇が病床を見舞つても素知らぬ顔で口を利かないという違いもあった。院の個性は家康とも大きく異なる。

家康によれば、実子をほしがるのは「早く家をゆづりあたへ、その所行を見さだめ、安心して残の齢を過ぎむがため」である。ところが、「家をゆづるは容易ならず。子の才器にもより、年の程もあるものなり」。そのうえに、世の成り行きや人びとの心をよく考えて家督を譲り渡すべきだと語る。家宝も家を継がせる「前かたにも追々にゆづり渡し、子に安心させるもよし」という家康の生き方は、次回に詳述するように貴重ならざるや道具の類まで仙洞御所に持ち去つた後陽成院と異なるところだ。以前は仲がよく慈悲深かった父と子が、隠居後、いつの間にか不和になった例も少なくない。父と子の情愛は初めから変わらないのに、「人びと年たけて後は、とかく成長の子を煩はしく思ふと、又子たる者の老たる親を大切と思はざるより互に隙出来て、他人にも不和に見ゆるなれ」。その時は親から茶の道具などを一つずつ与えれば、子の心も落ち着いて他人の疑いも消えるに違いない。「子をして不幸の名をとらせぬ様にせむこ